

家帖」を表装し箱に納めた後に入手したものを番号もつけて裏面に張り足したものか、後人の張り足しかと思われる。とにかくそのような事情で、前稿に次の七句を加え、補遺の追加とすることになった。要領は前稿同様である。（八十八から九十五までは和歌ゆえ前稿同様割愛に従う。）

八十一 うくいすやとちから来るも同じ時

□□□

八十二 山までは青葉つつきの□□かな

□□□

八十三 ころろゆく雨や董のはなの上

岱雲

八十四 きふより来初てやねは鴈の露

岱雲

八十五 まる寐して居たり鴨なく夜をひとり

岱雲

八十六 眼ほこりになる雲もなしけふの月

其石

八十七 出船も見しめぬ空を帰雁

昭三

八十一と八十二の作者は同一人で、八十三、八十四、八十五は岱雲で、前稿で四十三 長崎の□雲とし、右大内初夫氏の示教により岱雲であろうとされていた俳人と一致し、筆蹟が成長を思わせる点、あとでまとめて三枚入手したものであろうか。裏面に張られたものの共通点は国名地名の記入がないことである。

（平成七年十二月二十五日）

四十七 朝かほに夫婦の杖をならへけり 京 蒼那は  
作者 蒼虬か。

六十八の作者は杜昌ではなからうか。

七十一の作者不二は二柳ではないだろうか。(右檀上氏と同見)

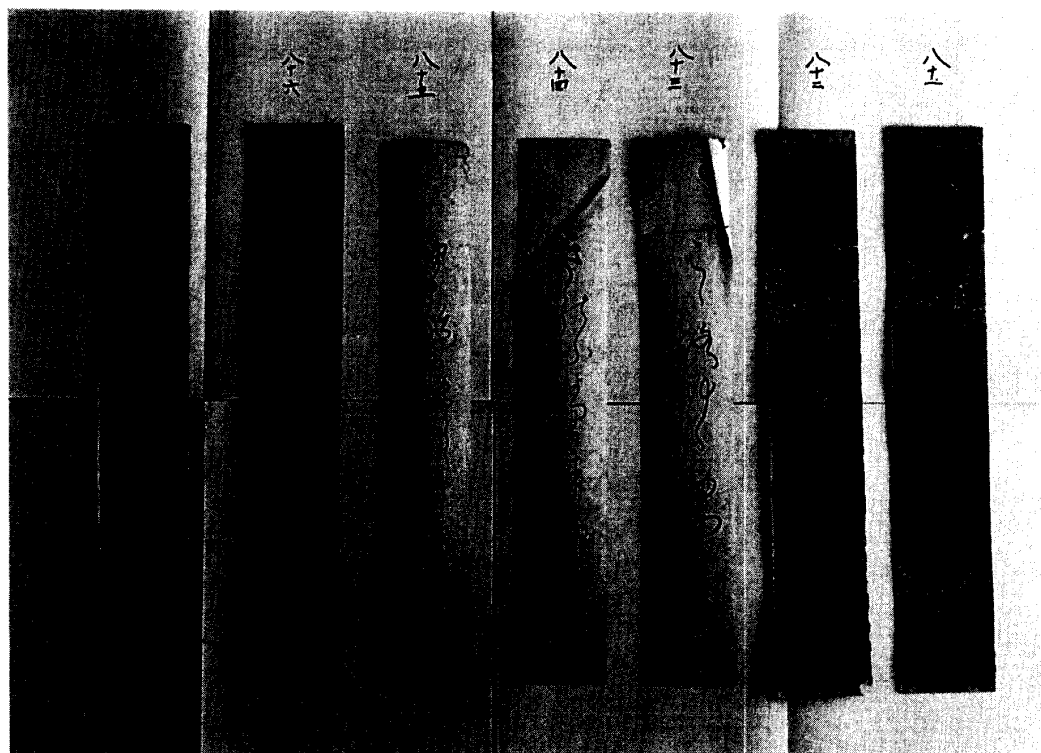
俳文学会会員諸賢それぞれご自身のご研究やおまとめにご多忙の中以上のような示教をいただいたので大変有難く、補遺報告に併せ、誌上を借りて厚く鳴謝申し上げます。

#### 追記

前号に加えるべき作者の俳号解説としては、四十七の蒼虬、七十の尺艾、七十九の士朗をあげるべきであろうが、これらの俳人については最近刊行の『俳文学大辞典』(角川書店・平成七年十月二十七日初版)に詳細が載せられているのでここでは割愛に従う。

#### 補遺追加

「俳諧名家帖についての調査」を一往了えたつもりであったが、その初めのところで述べたように保管のよろしくない状態に永くおかれていたせいで大半が湿気のため各頁どうし張りついていたりして、八十番の短冊と裏表紙の天保十二年辛丑年十二月中旬調之、まで翻読して、総て完了と思って発表したものであったが、その後句帖返却の段になって、裏面にも十数枚の短冊が張りつけられていることがわかり、無理を承知ではがしてみると表同様番号が付けられ八十一から八十七までが発句で、八十八から九十五までが和歌で、頭書番号もそれで終わっていることがわかった。したがって裏面に張られた八十一以下は、「天保十二年十二月中旬調之」で「俳諧名



# 『俳諧名家帖』についての調査」補遺

田尻龍正  
後藤多津子

本学紀要第21号（前号）抜刷の「俳諧名家帖」についての調査を  
俳文学会諸賢にお送りしたところ、以下のような示教をいただいた  
ので筆者相はかり今回はその「補遺」としてそのまま報告させてい  
ただくことにした。

その一 雲英末雄氏（早稲田大学教授）

七十 もの問へは ☐ 梅のぬし ナニハ 尺 ☐ は  
作者 尺艾 せきかい

七十九 秋風や舟よりふねへ行鳥 ヲハリ ☐ ☐ は

作者 士朗（井上）

その二 大内初夫氏（前鹿児島大学教授）

四十 いたつらに折も散さぬ木槿かな ヒタ 枕秋 は

作者 桃秋か

四十三 見あけたるこゝろもとらすふしの山 長崎 ☐ 雲 は

作者 岱雲か

六十三 なびきけり秋立朝の茶の煙り サツマ 翌州 は  
作者 琴州であろう。

六十八 藤の花むしる児は罪もなし 京 社昌 は

藤の花ではなく薺の花で、作者は祐昌

七十 の ☐ 内は「室に答つ」とよめ、作者は尺艾

七十九の作者は士朗

その三 檀上正孝氏（広島大学教授）

七十一 名月や影 ☐ ましのしのふ摺 ナニハ 不二 は  
作者 不二庵二柳であろう。

その四 櫻井武次郎氏（親和女子大学教授）

卅四の呂国は淡々とは別人と思われる。